

# 世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談

中島京子(作家)



画・浦沢直樹

©浦沢直樹 / スタジオナッツ  
 『バイナッブル ARMY』工藤かずや /  
 『PLUTO』長崎尚志+手塚プロダクション /  
 『MASTER キートン』長崎尚志、勝鹿北星 /  
 『MASTER キートン Reマスター』長崎尚志 /  
 『BILLY BAT』長崎尚志 /  
 協力:小学館、講談社

収蔵品のご紹介 齋藤茂吉『白き山』自筆原本  
 世田谷文学館開館20周年事業 「セタブンマーケット」開催報告

## 館長の作家対談

ゲスト  
中島京子  
(作家)聞き手  
菅野昭正  
(世田谷文学館館長)

『FUTON』『イトウの恋』『小さいうち』などを次々と発表し、先ごろ、『かたづの』で第28回柴田錬三郎賞を受賞されたばかりの中島京子さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

## 作家志望の中学生

菅野▼中島さんは、かなり長い作家歴をお持ちになりましたね。

中島▼いえいえ、12年程度です。

菅野▼小説をお書きになろうとお思いになったのは、いつごろからですか？

中島▼中学2年生の時に、最初の長編を書きました。そうしたら、プライバシーのない家庭で、父が部屋に侵入して、私の創作を発見してしまい、ものすごく怒られたのです。というのも、私の成績が悪かったからなのです。3つ違いの姉は、割と優等生で育ったのですが、私はだめでした。父は、大学の先生で、自分の娘が学校の勉強ができないということが信じられないようでした。国語のノートに書いていた私の長編を見つけて、「これか、こんなことのせいか」ということになってしまって、執筆停止という(笑)。

菅野▼その時は、どれくらいの分量をお書きになつてたのですか？

とか。手放して寝めることはなく、「ここが間違っているから直せ」という付箋が本に貼つてありました。でも、それが読んでくれた最後の作品になりました。

菅野▼そうですか。それはよかったですね。

中島▼そうですね。今考えてみると非常に。

菅野▼お父さまは僕にとつては、同じ大学の学科の先輩にあたるわけですけど、小説書きをめざす文学青年ではなかったのですか？

中島▼文学青年だったと思います。旧制松本高等学校の時から、病気でかなり悪くなるまで、ずっと短歌をつくっていました。

菅野▼松本ですか。辻邦生さんなんかと一緒にたか？

中島▼辻先生と一緒にです。学年も一緒に、北杜夫さんとか。それで、そのころから詩も書き始めていたようです。

菅野▼お父さまは、翻訳以外にもどんなお仕事を残されたんですか？

中島▼翻訳の仕事は、多く手がけました。それこそ、菅野先生に声をかけていただいて。集英社の……。

菅野▼集英社の『世界文学全集』。たまたま僕は、編集委員になっていたので、確かビュトルの『段階』をお願いしたような記憶がありますね。その他にジュリアン・グ拉克の翻訳で『半島』。これは中島さんならお願いできる、なんて思ったことがありますね。僕はそんな深いお付き合いじゃなかったけど、何度かお会いしたことはありますし、とても温厚なジェントルマンという印象でした。いいお父さまだったでしょうね。

## デビュー作について

菅野▼小説のことを伺いたいですが、『FUTON』でマッコーリーというのでしたっけ、アメリカの先生が日系の女子学生と仲良くなりますね。ああいうことがアメリカの大学では実際にあり得ることですか。

中島▼あり得ると思いますけれども。



中島▼国語のノートに10頁程でしょうか。

菅野▼それを読まれてしまったのですか、お父さまに。

中島▼読んだのか、見ただけで腹が立ったのかは、分からないのですけれど。

菅野▼盗み読みするとは、ご著書の『小さいうち』のお孫さんのようですね。

中島▼そうです、そんな感じで、こっそり書いてしまったものを見られてしまったという。イラスト付きだったものだから、ものすごくふざけていると思つたらしくて。

菅野▼教育ババですね、お父さまは。

中島▼もう大変なことになってしまい。それ以来、私の執筆活動は地下に潜行することになりました。(笑)

菅野▼地下潜行の時期は、どれくらい続いたのですか？

中島▼大変長く、こっそり書いていたのです。でも、それを表に出すにはどうしたらいいか分からない。臆病なところがあるものですから、賞に

菅野▼いちばんお聞きしたかったのは、アメリカの日本文学研究の世界で、ああいう話を実際にあつて、それがモデルになってああいう着想をされたのか、ということなのです。

中島▼それは、モデルになったのは田山花袋の『蒲団』そのものですから。構造を全部移し替えて、先生と教え子の関係、若い女の子とちよつと年取つた先生との恋愛、『蒲団』の田山花袋の場合は恋愛とは言えませんが、でもそういう関係があつて、女の子のほうにもつと若い恋人がでるという、そういうかたちをつくつたので、私の個人的な体験ではないのです。

菅野▼アメリカの学校で、そういうケースはあるのか、ちよつと気になったのです。というのは、フランスではかなり多いのですから。日常茶飯事とは言わなければ珍しいことではないのです。だからフランスの小説に出てきても不自然ではないのです。アメリカの場合は、どうなのか？

中島▼確かに、ビュリタンの国だから、もうちよつとフランスよりモラルが厳しそうな感じはしますけれど、実態としてはあると思います。

応募したりとか誰かに見てもらつたりということは出来ませんでした。家でこっそり書いて、姉にだけ見せて、「面白い」って言ってくれると嬉しいからまた書いて、その繰り返しでした。

## 父の思い出

中島▼「主婦の友社」に勤めていた時も、書きたい気持ちにはあつたのですが、仕事が忙しくなつて書けなくなつて。自分の思つていた方向じやないなと思つて、32歳の時に会社を辞めました。

菅野▼その会社は、10年くらいいらしたのですか？

中島▼7年くらい勤めました。会社を辞めたからといって、小説家になれるものでもないで、ともかくリセットするために1年間アメリカに渡りました。帰国後も書きたい気持ちが強く、5年くらいかけて『FUTON』という最初の小説を書き上げました。それがデビュー作です。常に書いているのですが、なかなか。潜つたものが浮かび上がるまで、すごく時間がかつたということです。

菅野▼再スタートの時は、お父さまは何もおっしゃらなかった？

中島▼はい。処女作が出たのが12年前ですが、

菅野▼なるほどね。『FUTON』では、いくつかの男女の関係がそれぞれ似ているようで、しかしかなり異なっているのが読みどころだと思いました。

中島▼デビュー作が出た時に時評を書いてくださいましたよね。初めて書いた作品でしたし、無名の新人のデビュー作なので新聞で取り上げていただけなんて本当に驚きました。

## 視点を覚えて——『FUTON』

菅野▼『FUTON』。ところで、「フートン」というのは、正しい発音ですか？

中島▼はい。

菅野▼ひいおじいさんも含めた、三つ巴の三角関係。その構想が面白く、とても感心いたしました。花袋の『蒲団』を手掛かりにされたのはどんなきっかけですか。

中島▼それは本当に偶然でした。姉がフランス人と結婚して向こうに住んでいることもあり、日本語の本を探していたのです。手元にあるものが少ないため、どこかで借りて、昔国語の授業で習つたこの本を読んだらしいのです。そうしたら「京ちゃん、これは面白い」ということになったのです。

学校の文学史の授業で習つた時には、笑える小説だなんで全く教わりませんでした。非常に、なんと言うか、苦悩に満ちた小説で、しかも自然主義文学の始まりで、心情を赤裸々に書くという。でも、困つた中年のおじいさんだなんていう感じが本当に出ていて、すごく面白かったです。

菅野▼そうですか。それは『蒲団』論の定石とずいぶん違っていますね。

中島▼ですが、読んでいるうちに、この奥さんというのが、名前も付けてもらっていない。

中島京子(なかじま・きょうこ)

小説家。1964年東京都生まれ。父は、フランス文学者で中央大学名誉教授の中島昭和。東京女子大学文学部史学科卒業。「主婦の友社」を退職後渡米。2003年『FUTON』(第25回野間文芸新人賞候補)でデビュー。06年『イトウの恋』(第27回吉川英治文学新人賞候補)、07年『均ちゃんの失踪』(第28回吉川英治文学新人賞候補)、08年『冠・婚・葬・祭』(第29回吉川英治文学新人賞候補)、

10年『小さいうち』(第143回直木三十五賞受賞)、14年『妻が椎茸だったころ』(第42回泉鏡花文学賞受賞)、15年『かたづの!』(第3回河合準雄物語賞・第4回歴史時代作家クラブ作品賞・第28回柴田錬三郎賞)、15年『長いお別れ』(第10回中央論文芸賞受賞)など著書多数。

『FUTON』  
講談社 2003年『小さいうち』  
文藝春秋 2010年『かたづの!』  
集英社 2014年『長いお別れ』  
文藝春秋 2015年

ちようにその頃に父が認知症になつてしまったのです。それでもデビュー作だけは、読んでくれました。読むのも書くのも好きな人なので、「あなたの小説を読むと眠くなるんだよ」とか、最後のほうになつて「どうなるかなと思つて結構進んだ」

妻は学がなく、文学を理解しなくて退屈で、アヒルのように歩くとか、あまりじゃないかと思ひました。読んでいる限りでは奥さんはつまらない人間には見えなくて、要所要所で結構すごいことを言っているのです。ですから、この奥さんはどんな人だったのだろうか、想像力が膨らんだのです。菅野▼なるほどね、とても面白い読み方ですね。今「笑える」とおっしゃつたけれど、僕らは「笑える」なんていうふうな読み方は全然できなかった。なにか先人観があつて、今おっしゃつたように、日本の自然主義的私小説の走りという尺度を当てはめて読んでみましょうね。それでも、昔はじめて読んだとき、笑えるというのとはちよつと違うけれど、滑稽だなとは思いました。特に最後のところで、中年のおじいさんが若い女弟子の蒲団のにおいを嗅いで涙を流す。なんだか、滑稽というか、馬鹿馬鹿しいという印象はありました。

菅野▼それから、中島さんの小説のお話で、僕たちの受け方と違うなと思つたのは、読み方というよりパステイッシュ(模作)のつくり方ですね。抜粋式というのか、肝心な要点を奥さんの立場で書き直したわけですね。それがとても新鮮な感じがしました。視点を覚えて、昔の名作を書き直して成功した試みを読んだのは初めてです。少なくともこれまで知る限りでは、ごく自然にああいう着想をされたわけですね。

中島▼『FUTON』という本に関しては、『蒲団』を読んだら奥さんのことがとても気になつてしまつてそうなたつたというのは一つあります。割と自然に出てきたことは出てきたのですけれども。でも、きょうお目にかつたら絶対にお伝えしようと思つていたのは、私の作風からいつてそういうことをたぶん誰も想像できないと思うのですけれど、私、若い時に先生の訳されたミラン・クンデラの『不滅』という小説を読みました。本当に好きな小説だったのです。というか、もうびつくりしちゃつて。なんて自由なのでしょうと思つて。菅野▼あれは視点をじつに自由に変えていきますからね。小説の書き方としては最大限に勝手に

奔放な例ですね。

**中島**▼小説というものが、いかに自由なものなのか。これをやってはいけないというようなことではないのだ、小説は。ということをやイレクトに受け取った読書だったのです。

**菅野**▼それはとてもいい読者ですね、訳した人間にとつても原作者にとつても。

**中島**▼私は誰から見ても割ときつちりした小説を書いている作家と思うのですが、それでも私の中ではすごく大きな読書体験だったのです。それ以来、「こんなのは変」とかそういうふうには思わないようにしているのです。

**菅野**▼そんなふうにして読んでいただいて大変ありがたいですね。ですから、もしそれが何か中島さんの小説を書く時の糧というのでしょうか、養分になっているとすれば。

**中島**▼絶対になっていると思います。

**菅野**▼いろいろな作品を拝見しての感想ですが、視点をいろいろ変えて構成されるのが、中島さんの作風の際立つた特徴ですね。例えば『均ちゃん』の失踪』では3人女性がいます。年取った大家さん兼美術の先生。それから、フランスへ行ったキャリアウーマン。それから一番若い、あの人は片桐薫といいましたつけ、編集者ですね。それぞれの視点で均ちゃんを見ている。ただ、均ちゃんっていう人は、何でこんなに女性にもてるのか、嫉妬を感じるほどですね。

**中島**▼そうですね(笑)。駄目だからじゃないですか。**菅野**▼均ちゃんは、人物として軽つぽくあまり存在感がないでしょう。

**中島**▼そうですね。

**菅野**▼そういうふうにお書きになったのでしょうか、れど、そこがいいのですね、影が薄いのに、重要な存在であるところと、とても面白く読めるんですね。**中島**▼ありがとうございます。たくさん読んでいただいて申し訳ないです。

#### ユーモア溢れる『小さいおうち』

**菅野**▼どの作品も、中島さんのそれは天性のもの

おいしそうに書かれている。食べたいなと思ったりして。意地が汚いものですから。(笑)

**中島**▼やはり食べるのがすごく好きなので。もちろん、作るのも好きです。(笑)

ところで、年配の方からの感想をいただくと、ご自分の記憶で行間を埋めるようにして読まれていらつしやるのがわかります。ですから読者の心の中では、私の書いたものより数段いいものになっているのではないかつて感じます。みなさん「このとおりでした」つておっしゃるけれど、いや、たぶんそうじゃなくて、そこは行間をつつて読んでらつしやるのだなと思います。

**菅野**▼読んでみると、いろいろなことを思い出して、自分の生活をもう一度生きるといふ、人生をもう一度生きるような感じがしました。それから中島さんの小説は、最後の結び方がとても上手に作られている。いつも感心するんですよ。特に『小さいおうち』は、親戚の男の子が北陸へ訪ねていく場面

最後の1章を作った効果で、そこまでの話が一段と活気を帯びてくる感じがするのですね。

『FUTION』でも最後のところはとても上手に、いかにも小説の終わり方、小説らしい小説の終わり方だと思いました。『均ちゃん』もそうですね。最後は女性のひとりばかりへゆく話で、きちんと締めくくられていますし。

**中島**▼みんななくなっちゃう。

**菅野**▼めでたく就職していくというのがなかなかいいですね。

#### 初の歴史小説 ―『かたづの!』

**菅野**▼『かたづの!』は、時代小説といつか、歴史小説は初めてですか。

**中島**▼そうですね。初めてです。この題材ですが、最初は、女の大名がいたということが面白く、「こういうものを誰かが書く」と大河小説になりそう」などと、人ごとのように思っていました。調べてみたら大変面白い人物だったのです。そして、場所が東北でしたので、ちょうど震災の後後に取材へ行くことになりました。震災前の取材



かもしれないけど、ユーモアがあつて。あれは意識的にそういうふうにして書こうとなさるのですか。それとも自然に出てくるもの？

**中島**▼もともとそういう、「笑える」とか「おかしい」ということがすごく好きなのです。だからクンデラは難しい小説だと思ふけれど、読めてしまったのはやはり、ユーモアがある小説だからだと思ふます。

**菅野**▼ユーモアとアイロニーとが合体しているから。**中島**▼そうですね。ちよつと冷たいといつか、意地の悪い笑いなので、私の小説の「笑い」とは違ふかもしれない。でも小説の中に「笑い」が入っているものが好きなので、自分でも書く時には自然にそういうものが入ってくるし、入つてこないちよつと筆が進まないところもあります。

**菅野**▼ごく自然にユーモアが湧き出してくる、というふうにして読ませていただいているのです。それからあと、ユーモアとウィットといつか。フランス語ではエスプリとよく言いますね。近ごろ「エスプリが効いている」なんてあまり日本では言わなくなつてしまつたけれど、昔はよくエスプリ、エスプリつて言つてましたね。英語で言えばウィットでしょうけれど。面白いなと思ふのは、例えば『小さいおうち』の作中のマルタン・ド・ゴールという作者の『待ちぼうけの人々』、あれはエスプリの効いた細部で、それこそ大いに笑えました。

**中島**▼それはやはり、菅野先生ならではの発見かもしれないです。

**菅野**▼ああいうのはとつさに気が付くのですか。それともいろいろ日常生活の中でふと思ひいたり、あるいは誰かが言つた言葉をメモしたりとか、そういうことはあります。

**中島**▼普段、メモはしないのです。確かあれは、『小さいおうち』を書く時に新聞記事とかいろんな資料を見ていましたら、山内義雄さんの翻訳、ロジ・マルタン・デュ・ガール著『チボー家の人々』が出たんですね。戦時中の新聞を見ていたら広告が出ていて、「ああ、このころに出た本なのだ」ということが頭にあつたものですから、『小さいおうち』の登場人物もこの本を読んだかもしれない。

女の殿様が生きた頃に再話されたらしい伝承が残つていたりするのです。そうすると、それが河童の話であらうと何であらうと、小説の中では同じに扱つてもいいのではないかという気がしてきて。それで、民間伝承みたいなものと歴史的な史実みたいなものを混ぜあわせた小説が出来上がったのです。

**菅野**▼これからは歴史小説つて、これで味を占めてという言い方は変だけれど、何かお書きになるご予約はありますか？

**中島**▼皆さんそうおっしゃるのですけれども、なかなか。何か面白い題材が見つかったら書こうと思ふのですけれど、今はまだそういう感じではないのです。

**菅野**▼どうしても女性の主人公を中心というところになりますか？歴史小説をお書きになる場合でも……。

**中島**▼何となくそうなる傾向は、あるのかもしれないですね。特にこれを書いた時に思つたことですが、この人は女の人で殿様になるのですけれど、そんな人はなかなかいませんでしたし、それを発掘するだけで女性としてはちよつと元気になるようなところがあります。女の人の話というのは、まだ語られていないことも多いと思ふます。やはりそういう、まだ書かれていない女性の話などがいかなとは思ふます。

**菅野**▼適切な題材にぶつかるといいですね。女性のほうがそもそも文章は上手なのかもしれないし。小説とか文学的な小説に近いエッセーにしても、男性よりも女性のほうが向いている、ところがあるような気がします。

**中島**▼菅野先生は、女性に優しいのかもしれないですね。

**菅野**▼文学の世界でも女性の活躍は結構なことですが、その中でも大事な担い手の一人でいらつしやるんですから、これからのいろいろな領域を広げて楽しませてください。今日はありがとうございました。

**中島**▼ありがとうございました。

(2015年10月10日 世田谷文学館館長室にて)

ないと思つていました。でも、絶対に女中のタキちゃんには「マルタン・デュ・ガール」つて言われても覚えられないと思ひ、とはいへ、ドゴール將軍とかそういう名前には絶対知つていただろう、そんなことを思つてつくつたんです。

**菅野**▼素晴らしいディテールです。**中島**▼語呂合わせみたいなことは好きで、あれは自分では楽しんで入れたのですが、気付いてくださる方はそんなに多くないと思ふます。

**菅野**▼今の若い人は『チボー家の人々』など読まないでしょうからね、気が付かないかもしれないけれど。惜しいですね、ああいうのを気が付いてくれる人がたくさん増えるといいのだけれど。

**中島**▼気が付いてくださる方がいると嬉しい。

**菅野**▼それで『小さいおうち』の話を戻りますが、僕は『小さいおうち』の同時代を生きていることになる世代ですね。女中さんのタキちゃん東京へ出てくる。その年に僕は生まれたのです。小説に出てくる話題が、例えば二・二六とか、それから天皇機関説とか、南京陥落の行列とか、いちいち覚えがある。あのころの雰囲気は非常によくつかまえていらつしやるのに感心しました。詳しく描写しようとする年代もたつてくるから難しいけれど、逆に、あまり描写をしないところがとてもいいんです。うまくまとめて運んでいく。だから、僕らの年代の読者が本当は一番いい読者かもしれない。

**中島**▼そうですね。

**菅野**▼文化住宅といつかのはあの頃どんな方々にできてきたでしょう。『小さいおうち』では、この地域を想定して書かれたのですか？

**中島**▼あまり明確にはしていなくて、ミックスしたイメージで書いています。

**菅野**▼西洋館が玄関を入つて右側にあるとか、まんなかに廊下が通つていとか、そういう当時の間取りがともうまく再現されておられると思つて。ああいうことはお調べになつたのですか。**中島**▼そうですね。家の形とか、間取りがどうだったとか、資料をみました。あと、食べているものも調べました。

**菅野**▼食べものについていえば、読んでいてとても

#### 展覧会のご案内

世田谷区内在住の書家による

第35回 世田谷の書展

― 世田谷ゆかりの作家たち ―

2016年1月5日(火)～11日(月祝)  
1階文学サロン

現代書壇で活躍する世田谷区在住の書家39名が、会派を超えて「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマに新作を、堂に披露する、世田谷の文学館ならではのユニークな書展です。

|                  |        |        |  |
|------------------|--------|--------|--|
| 出品予定書家(五十音順、敬称略) |        |        |  |
| 縣 青石             | 川口 青澄  | 坪西 美枝  |  |
| 荒谷 大丘            | 久保田 青澄 | 戸田 幽翠  |  |
| 安東 麟             | 久村 拓司  | 永井 閑翠  |  |
| 池亀 壽泉            | 黒田 石鼓  | 野口 泰雲  |  |
| 石川 昌亭            | 小久保 展代 | 野口 白雲  |  |
| 泉原 壽巖            | 後藤 俊秋  | 服部 葆竹  |  |
| 稲村 雲洞            | 小林 早容子 | 廣野 卓風  |  |
| 稲村 龍谷            | 棒 菖扇   | 深田 東穂  |  |
| 上田 南郷            | 師田 久子  | 丸尾 謙使  |  |
| 白倉 仔龍            | 下坂 華仙  | 村井 虹城  |  |
| 卯中 恵美子           | 鈴木 曉山  | 安岡 田鶴子 |  |
| 太川 啓子            | 竹内 青紗  | 横山 喜代子 |  |
| 大根田 照雲           | 田中 栄子  | 渡邊 鄧美子 |  |
| 観覧料 無料           |        |        |  |

鑑賞講座(ギャラリートーク)

「書」の豊かな楽しみ方を探してみませんか。出品書家と鑑賞しながら、見どころや作品をわかりやすく解説します。芸術作品としての書を鑑賞して感性を磨きたい、書をこれから始めてみたいという初心者の方もお気軽にご参加ください。

1月8日(金) 田中栄子(かな作家・読売書法会理事)  
10日(日) 川口青澄(漢字かなまじり作家・読売書法会理事)

各日14時～15時、当日会場にお越しください。

◎ 椎名麟三資料 ◎

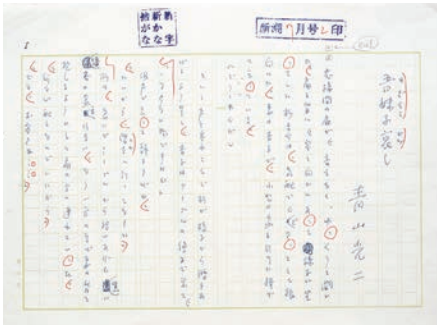
寄贈者：大坪經子様  
寄贈品：椎名麟三草稿、創作メモ、講演メモなど(163点)

ノートに米粒ほどの文字で書かれた椎名麟三の草稿、メモ類。  
代表作『重き流れの中に』『永遠なる序章』などの草稿も含まれる。



◎ 青山光二資料 ◎

寄贈者：茉莉デイビイ様  
寄贈品：青山光二原稿、写真、関連図書など(28点)



青山光二原稿『吾妹子哀し』

◎ 山本嘉次郎資料 ◎

寄贈者：林 謙治 様  
寄贈品：山本嘉次郎原稿、愛用品、監督映画スチール写真など(364点)



山本嘉次郎原稿『カルメン故郷に帰る』

◎ 下飯坂菊馬旧蔵台本 ◎

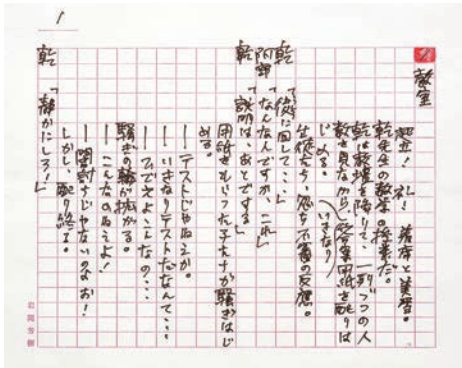
寄贈者：一般社団法人シナリオ作家協会様  
寄贈品：下飯坂菊馬ドラマ台本など(819点)



『鬼平犯科帳』台本

◎ 岩間芳樹資料 ◎

寄贈者：岩間慎子様、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム様  
寄贈品：岩間芳樹ドラマ脚本原稿、創作メモなど(107点)



岩間芳樹原稿『3年B組貫八先生』

2014(平成26)年度の収蔵品について

資料受贈報告

▼阿部弘一様からフランス・ボンジュ関連資料 大坪真美子様から椎名麟三写真252点 香川京子様から壺井栄書簡・新しき村五十記念銅板レリーフ5点等 齋藤喜美子様から北杜夫旧蔵の齋藤茂吉関連資料

▼小川靖彦様 小島光子様 清水茂様 杉本利男様 多田暁代様 林ゆみ様

▼青森県近代文学館 朝倉彫塑館 アジア文化社 射水市大島絵本館 かこしま近代文学館 かこしまメルヘン館 北九州市立文学館 草野心平記念文学館 慶應義塾大学アート・センター 国立国会図書館国際子ども図書館 小杉放菴記念日光美術館 小諸市教育委員会 斎藤茂吉記念館 坂の上の雲ミュージアム 佐佐木信綱研究会 子規記念博物館 石神井公園ふるさと文化館分室 杉並区立郷土博物館 成城大学 センガわ・まち ティ情報センター 台東区芸術文化財団 館林市教育委員会 多摩美術大学美術館 鶴書院 東奥日報社 東京書籍 徳島県立

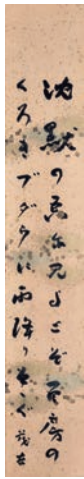
文学書道館 中原中也記念館 姫路文学館 福岡町立柳田國男・松岡家記念館 ふくやま文学館 文京ふるさと歴史館 前橋文学館 前橋文学館友の会 岬の分教場保存会 森岡外記念館 山梨県立文学館 やまなし文学賞実行委員会

▼「あけび」新しき村「宇宙風」海「海紅」がいこつ亭「風花」寒雷「骸體」くさくさ「九品仏川柳会句会報」

「原型富山」現代文学史研究「鴻」心の花「さつき」山

2015年6月5日～10月10日

短冊 沈黙の音に見よとぞ百房のくろきブダウに雨降りそぐ 茂吉」と表記されている。



（小園「収録」

沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨降りそぐ

開戦以来おびたしい戦争謳歌の作品を作ってきた愛国者の茂吉にとっては、「忘ル、ナカレ、悲痛ノ日」(同前以外のものでもありませんでした。青山の自宅は5月の大空襲で全焼し、家族もばらばらに散り、東京に帰りたくとも帰れなかつた茂吉は、幼少の自分を育んだ故郷の山や川を歩き、ひたすら沈黙に耐える日を送ります。このたび寄贈された資料の中に、当時の歌をしたためた短冊があります。

1945年8月15日、太平洋戦争は日本の無条件降伏という形で終結しました。63歳の茂吉は故郷である山形県の新潟村(現・上市市)にある妹の婚家先に疎開していました。「一億玉碎ノ決心ヲ心ニ据エ」(『日記』より)羽織で威儀を正して玉音放送に臨んだ茂吉でしたが、流れてきたのは戦いの終わりを告げる天皇の言葉だったのです。

「沈黙のわれ」

齋藤茂吉の晩年の傑作として知られる第16歌集『白き山』(1949年 岩波書店刊)の自筆原本ほか茂吉の関係資料102点が、2014年度に齋藤喜美子様(北杜夫人)から当館に寄贈されました。今回はこの自筆原本を中心に、戦後の茂吉をめぐるエピソードをご紹介します。い

齋藤茂吉『白き山』自筆原本

当館収蔵品の紹介 55



最上河畔での茂吉 1947年8月14日 撮影:佐々木勇

「短歌研究」の1945年10月号に「岡の上」と題して発表された五首のうちの一詩です。打ちひしがれた作者に葡萄の房の群れが囁きかけるのは、慰めでしょうか、励ましでしょうか。それとも人事に左右されない自然の強靱さを見せつけているのでしょうか。茂吉の短歌の特色でもあるリズム感の良さ、「見よ」という命令形の力強さ。絶望や煩悶の底に、かすかな再生への意志も読み取れるようです。

よみがえる詩魂

1946年1月、茂吉はアララギ会員板垣家子夫の世話で、山形県北部の大石田にひとり移住します。大石田は最上川流域に発展した町で豪雪地帯として知られ、茂吉は移住早々肋膜炎を病み一時は重態に陥りますが、周囲の人びとの献身的な看護と、長男・茂太が東京から持参した薬によってようやく回復します。

ながらへてあれば涙のいつるまで最上の川の春ををしまむ

大石田は芭蕉がかつて『奥の細道』で訪れた土地でもありました。山形県人にとっては母なる川ともいえる最上川の豊かな四季に抱かれて、茂吉の詩魂は徐々によみがえり、新境地ともいえる気魄のこもった秀作群を生み出していきました。

最上川の上空にして残れるはいまだうつろしき虹の断片

最上川に手を浸せば魚の子が寄ってくるかなや手に触るまで  
かりがねも既にわたらずあまの原かぎりも知らに雪ふりみだる  
最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

いつぼう、敗戦の挫折感、東京から聞こえてくる戦争協力への糾弾や短歌の存亡をめぐる議論の声、そして、しのびよる老いへの不安は通奏低音のように茂吉の心に響いていました。こうした感情の表出が、この時期の作品を陰影の濃いものにしていきます。

くらがりの中におちいる罪ふかき世紀にゐたる吾もひとりぞ  
オリヅのあぶらの如き悲しみを彼の使徒もつねに持ちてあたりや  
老いし齒の痛みゆるみしき夜ふけは何といふわが心のしづかさ

旧制松本高校に進み、父の歌集を読むようになった次男の宗吉(北杜夫)は休暇中、初めて父が歌を作る姿を目撃します。

父はたまに私を連れて散歩に出た。ときどき立止つては瞑目した。手帳になにか書きつけることもあった。近所の神社の境内へ行くとき、サンダワラを持つていつて、それを地面に敷いて腰を下ろし、長いあいだじつと瞑目した。彫像のように身じろぎもしなかった。

（北杜夫『茂吉晩年』より）

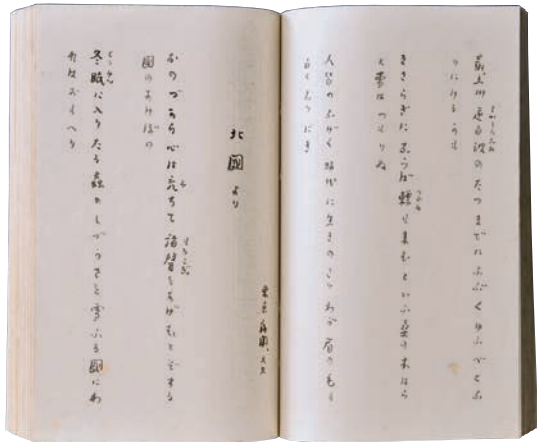
自ら歌集を編纂

自筆原本『白き山』は、大石田移住から世田谷代田の家族のもとに帰京する1947年11月までの歌八二十四首を自ら編集し、清書したものです。編集作業は翌48年の7月末から8月末にかけて、箱根にあった山荘で、第15歌集『小園』の編集と並行して行われました。雑誌や新聞への発

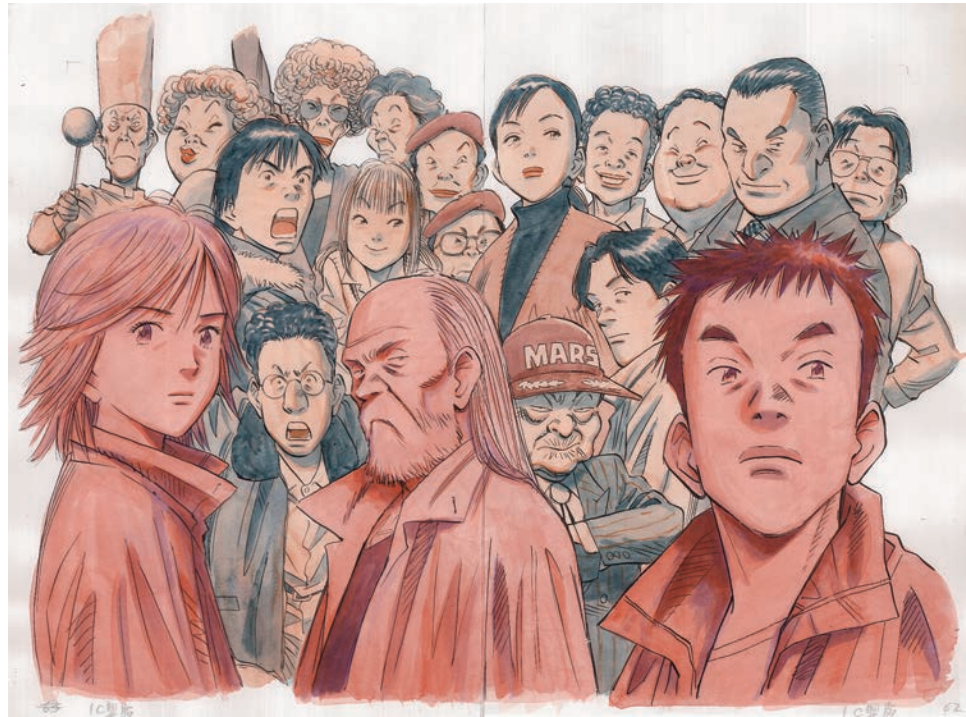
表作のほか、手帳に書きつけた未発表や未完成の作品を推敲したり改作したりしながら時系列に沿って構成し、一字一字を毛筆で書きつけていくというたいそう手間のかかるものでした。

驚かされるのは、後日書籍として刊行するときのために、ページごとの文字組やレイアウトまで行っている点で、いかに精魂を傾けて作業にあたったかが推察されます。「手が震へて清書が旨ク出来ナクナツタ」と日記にはつづやきながらも、8月19日には2冊の歌集を綴じ、25日には、増補改訂も加えています。自身期するところもあったのでしょう。自筆原本『白き山』からは、60歳を過ぎて、新たな境地をひらいた茂吉の心の高揚も伝わってきます。

大石田からは少年の茂吉が金瓶村で朝晩仰いだ蔵王の山頂もかすかに見えるそうです。その蔵王に連なる奥羽山脈のふところ、最上川のほとりで過ごした1年10か月は、傷心の老歌人に大きな実りをもたらしたのです。



自筆原本『白き山』「逆白波」の頁



『20世紀少年』©浦沢直樹・スタジオナッツ



『Happy!!』©浦沢直樹・スタジオナッツ



『PLUTO』©浦沢直樹＋長崎尚志＋手塚プロダクション



『BILLY BAT』©浦沢直樹＋長崎尚志

【申込方法】 開催日の各2週間前(必着)までに、Eメール(urasawaten@gmail.com)にて

- ①氏名(ふりがな)  
※2人まで連名可
- ②年齢 ③〒・住所
- ④電話番号を明記し、タイトルにイベント名を記載してお送りください。応募者多数の場合抽選。

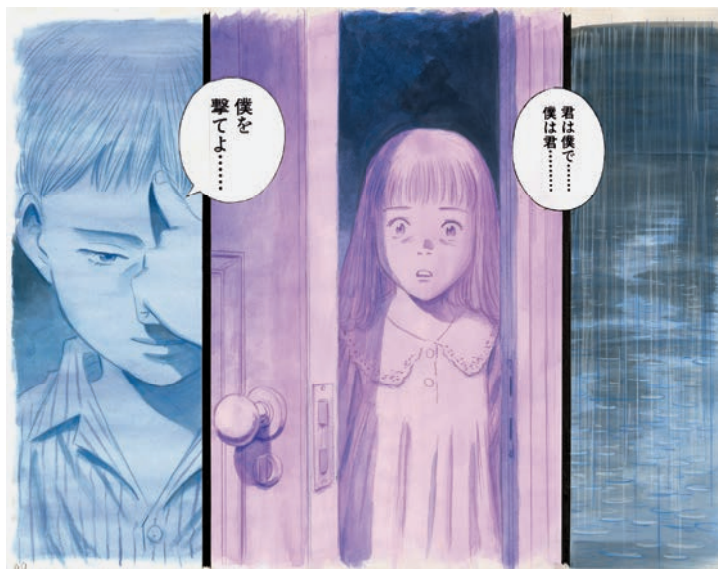


浦沢直樹 1st アルバム  
『半世紀の男』  
©Studio Nuts & S.O.S. Production co., Ltd.

浦沢直樹(うらさわ・なおき)さんは、1960年東京生まれ。1983年「BEAT!!」でデビュー以来、ヒット作を次々と世に送り出し、手塚治虫文化賞、メディア芸術祭マンガ部門優秀賞ほか数々の賞を受賞、海外にも熱狂的な読者を持つ日本を代表する漫画家です。



『YAWARA!!』©浦沢直樹・スタジオナッツ



『MONSTER』©浦沢直樹・スタジオナッツ

世田谷文学館開館20周年記念

## 浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる

2016年1月16日(土)～3月31日(木)



浦沢直樹

ムに加え、秘蔵イラスト・少年時代の漫画ノート・スケッチなど圧倒的な量の展示で、浦沢直樹の「描いて描いて描きまくる！」が体感できる、初の展覧会です。

「やっていることは子どもの頃と同じなのにね」  
(『漫勉』2008/小学館)

4歳からマンガを描き始めていたという浦沢さん。手塚治虫の漫画を毎日読み続け、やがて模写をするようになり、手塚のサインまでまねていたそうです。

大学時代に描いた漫画が出版社の目に留まり、漫画家デビューを果たしますが、それまでは一度も漫画家になるとは思ったことがなかったと浦沢さんは言います。

小学校時代から作っていた漫画ノートや、時間があれば描いているという無数の「落書き」を目

の前にすると、浦沢さんにとって「描く」ことは、デビュー前も後もまったく変わらないのだということがわかるでしょう。

「必死に頭を抱えて人を楽しませようとする。それがエンターテインメントですもんね。」  
(『漫勉』同前)

浦沢作品のテーマは、スポーツ、コメディ、ミステリー、SF、歴史、等と多岐にわたっていることに、あらためて驚かされます。ただひとつ共通するのは、どの作品もその世界に一気に引き込まれ、次の展開を待たずにはいられない、とびきり楽しい体験をさせてくれるということです。



『MASTERキートン Re マスター』©浦沢直樹＋長崎尚志

本展では、浦沢直樹の放つ極上のエンターテインメントの世界が、私たちを迎えてくれます。

2016年1月、待望の展覧会がいよいよ開幕します。  
浦沢直樹の魅力全開の会場で、ぜひお会いしましょう！

### 関連イベント

展覧会を記念して、スペシャルイベントを開催します。お楽しみに！

- ①トーク「ひとり漫勉」  
1月24日(日) 15:00～16:30  
出演:浦沢直樹 参加費:1000円 定員:150名
- ②トーク&LIVE  
「ボブ・ディラン 聴いて歌って描きまくる」  
1月31日(日) 15:00～16:30  
出演:浦沢直樹  
聞き手:白木哲也(ソニー・ミュージック)  
参加費:2000円 定員:150名  
共催:ソニー・ミュージックエンタテインメント
- ③浦沢直樹バンド LIVE  
3月12日(土) 18:30～20:00  
出演:浦沢直樹バンド  
参加費:2000円 定員200名



浦沢直樹  
2014年「日本SF展」記念  
トーク&ライブより



紙巻きオルゴールのtroisさんはキットの販売と体験ワークショップを実施。パンチを使いシートに穴をあけていくと、その形や文字が音楽に変化する、作曲可能なオルゴール。



開催日時:  
2015年6月27日(土) 10～20時  
28日(日) 10～18時

会場:  
世田谷文学館 1階文学サロン

出店・出品者一覧(敬称略)

[古本]  
suiran / BIBLIOPHILIC & bookunion  
新宿 / 百年 / ほん吉 / magnif /  
LOS PAPELOTES

[家具・雑貨]  
あさだ工房 / iruinai / Ye Olde Haunt /  
OLD NEW THING / かまわぬ / Coci la  
elle / 古物百貨店 ALL TOMORROW'S  
PARTIES / trois / ナンセンス 下北沢 /  
仁平古家具店 / ハチマクラ /  
Petit Musée / POLKE / MACRI

[フード]  
A.K Labo / GANORI / 喫茶どんぐり /  
puer / BEAR POND ESPRESSO

[ワークショップ]  
trois / ネイチャーコラージュ

[特別出品]  
青木画廊 / 青木奈緒 / 榎本了壺 /  
角田光代 / 今日マチ子 / 窪島誠一郎 /  
クラフト・エヴィング商会 / 椎名誠 /  
鈴木芳雄 / 建石修志 / 谷川俊太郎 /  
中川李枝子 / 名久井直子 / 萩原朔美 /  
ポスター・ハリス・カンパニー / マブゼ共和国  
(北杜夫主席) / ミロコマチコ /  
ムットーニ / 矢吹申彦 / 夢枕獯 /  
吉増剛造 / 吉本ばなな



ミロコマチコさんの出品コーナー。すべてに手書きのキャプション付き。下段に少し見えるのは、ハンドメイドの「ミロコ民芸」。



初日に開催した、アートディレクターの榎本了壺さんによる実演販売「開運 あなたの名前を書きます」(300円)。開運祈願者が絶えることなく、その数、3時間で60名以上でした。



2日目に開店した、名久井直子さんによる「名久井がらくた商店」。国内外で買い求めた文具や雑貨に加え、切り紙の即興制作・販売もありました。



子どもたちに大人気で、終始賑やかだった無料ワークショップ「ネイチャーコラージュ」のコーナー。自然の素材を使って、植草甚一のようにコラージュづくりを楽しみました。講師は写真家で自然観察指導員の須藤正男さん。



作家の北杜夫が自宅で建国した「マンボウ・リュ・バック・セタガヤ・マブゼ共和国」の特別輸出品コーナー。同国の齋藤喜美子「大蔵大臣」よりご提供いただきました。

この趣旨を反映し、これまで文学館の活動にご協力をいただいていた、作家 デザイナー、編集者、計21名の方々からも、私物を出品していただきました。谷川俊太郎さん、吉本ばなさん、角田光代さんなど、錚々たる方々の愛用品、蒐集品、創作資料や作品など、ここでしか買えない物ばかりです。さらに、自動人形師のムットーニさん、フクヘンこと編集者の鈴木芳雄さん、ブックデザイナーの名久井直子さんには、実際に店主としてご登場いただき、とてつもなく豪華な「文学バザール」となりました。

博物館と蚤の市は、実は理にかなった取り合わせでもあります。古代ギリシアの学芸の神々、ムーサイを祀った神殿「ムセイオン」が、ミュージアムの語源といわれています。つまり、博物館の原点は、神殿なのです。そして、日本の神殿「神社仏閣」では、古くから市が催されています。そこは、地域の人々が集い、人と人、人と物が交流する、一種の広場のようなのです。それはまさに、地域の博物館である当館が、理想と

する空間でもあります。梅雨明け前の不安定な天候のなか、2日間で合計3430名のお客様にご来場いただけたことは、会場キャパシティを考へても最良の結果でした。幅広い層のお客様が様々な目的で来場し、買い物を楽しみながら、植草甚一やその他の作家・作品と出会い、文学への興味を深めていただけたことと思います。最後になりましたが、全国各地からご来場いただきました皆様、お忙しい

ところへご来店いただきました各店舗の皆様、前例のない依頼にもかかわらず、特別出品をご快諾いただきました皆様、三步屋とセタブンマーケット両方において、ディレクションはじめご協力を賜りましたTOKYO PISTOL・vbook pick orchestraの皆様へ、厚く御礼申し上げます。セタブンマーケットは、今後も新たな切り口で、第2回を開催できればと考えています。



グラフィックデザイナーの大原大次郎さんによる「コトバジ」。植草甚一にまつわるコトバ、「ぼく」と「宝」を新たに制作し、上祖師谷のOLD NEW THINGさんが販売してくださいました。

## 開館20周年の祝祭として

## 地域の広場として

## 植草甚一×開館20周年の祝祭＝蚤の市！

今年度開館20周年を迎えた当館では、記念企画の一環として、新たな形態の事業に取り組んでいます。

6月27、28日の2日間にわたり開催した、「セタブンマーケット」と題する蚤の市もその一つです。

開館20周年記念展「植草甚一スクラップ・ブック」との連動企画として開催しました。今回は、そのレポートをお届けします。



植草甚一、ニューヨークのアクセサリーショップにて 1974年 撮影:青野義一

植草甚一にとって買い物とは、買うまでのプロセス＝散歩まで含めた楽しみでした。飽くことなき好奇心と探究心

「ゼイタク感という安いゼイタク」(1973年より)

植草甚一にあって買い物とは、買うまでのプロセス＝散歩まで含めた楽しみでした。飽くことなき好奇心と探究心

植草甚一にあって買い物とは、買うまでのプロセス＝散歩まで含めた楽しみでした。飽くことなき好奇心と探究心



開場と同時に行列ができた、ムットーニさんの「露天商 忘れ物」。今回のために100点以上の小型作品を制作していただきました。



鈴木芳雄さんによる、「フクヘンの百円古書市」コーナー。『ゴルゴ13』から牧野富太郎著「原色 野外植物図鑑」まで、バラエティに富んだ数百冊の放出版が2日間で完売しました。

映画、ミステリー、ジャズ、雑学と、ジャンルレスに健筆をふるった植草甚一(1908～1979)。そのエッセイには、日々の買い物のエピソードが頻繁に登場します。

ぼくは散歩が好きな男だ。それが何か売っている場所でないで散歩する気が起らない。(中略)何かしら買つて帰らないと、その晩の仕事がはかどらない。

につき動かされるように、古本、レコード、文房具や輸入雑貨を求め、生涯都市の遊歩を楽しみました。

「植草甚一スクラップ・ブック」展において、こうした散歩＝買い物の達人としての側面を体験的にご紹介するための仕掛けとして、はじめは会場内に古本屋氏が晩年構想していた古書店「三步屋」をつくり、そこで実際に買い物ができるようにしようと考えました。しかし、販売に関しては実現困難な面があり、最終的には植草甚一が紹介した作品や関連する本など、古書数百冊を店内に陳列し、手にとってご覧いただきました。

三步屋の仮想再現は多くのお客様からご好評をいただきましたが、さりとて、植草甚一の回顧展で買い物が楽しめないとは画竜点睛を欠くというもの。そこで、植草流買い物の体験空間を形をかえて実現したのが今回の蚤の市です。



「三步屋」コーナー。植草甚一が古本屋で勝手に値段を(適正価格に)書き変えて買っていたという逸話をふまえ、「J・J」割引も実施。

## 「セタブンマーケット」開催報告

## 植草流買い物の体験空間として

## 企画展

第35回 世田谷の書展  
世田谷ゆかりの作家たち

2016年1月5日(火)～1月11日(月・祝)

1階文学サロン 観覧料:無料



浦沢直樹展  
描いて描いて描きまくる

2016年1月16日(土)～3月31日(木)

2階展示室

観覧料:  
一般800(640)円  
65歳以上・大学・高校生600(480)円  
障害者400(320)円  
小・中学生300(240)円  
\*( )内は20名以上の団体割引  
\*1月22日(金)は65歳以上無料

『BILLY BAT』©浦沢直樹+長崎尚志



## 企画展

第35回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち  
2016年1月5日(火)～11日(月・祝)

浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる  
2016年1月16日(土)～3月31日(木)

12月

2016年1月

2月

3月

## コレクション展

特集・戦後70年と作家たち II  
～2016年4月3日(日)まで

## コレクション展

「特集・戦後70年と作家たち II」

2016年4月3日(日)まで

1階展示室



観覧料:一般200(160)円 大学・高校生150(120)円  
小・中学生100(80)円 \*中学生以下は土・祝・日は無料  
65歳以上・障害者100(80)円 \*( )内は20名以上の団体料金

休館日:  
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:  
10時～18時  
(ただし展覧会入場は  
17時30分まで)

交通案内  
京王線「芦花公園」駅  
南口より徒歩5分  
小田急線「千歳船橋」駅  
より京王バス(千歳鳥山  
駅行)利用「芦花恒春園」  
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南鳥山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

## せたがや文化財団の催し物

■世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]

●スペインの彫刻家フリオ・ゴンサレス

ーピカソに鉄彫刻を教えた男

2015年11月28日(土)～2016年1月31日(日)

フリオ・ゴンサレス《ダフネ》  
1937年頃  
バレンシア現代美術館蔵  
© IVAM, Institut Valencià  
d'Art Modern



●ファッション史の愉しみ

ー石山彰ブック・コレクションよりー

2016年2月13日(土)～  
4月10日(日)

『ラ・モード』1846年11月5日



ミュージアム  
コレクション III

●〈それぞれのふたり〉

シリーズ

「小泉淳作と小林敬生」

2015年12月20日(日)～

2016年3月27日(日)

小林敬生《漂白 No.8》1981年



■世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

●改修工事のため休館

2015年12月7日(月)～2016年2月5日(金)

●向井潤吉 西日本紀行

2016年2月6日(土)～3月21日(月・祝)

■世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

●清川泰次の生活デザイン

2015年12月19日(土)～2016年3月21日(月・祝)

■世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

●画家と写真家のみた戦争

ー宮本三郎、久永強、向井潤吉、師岡宏次

2015年12月19日(土)～2016年3月21日(月・祝)

■世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1526]

●『同じ夢』

2016年2月5日(金)～2月21日(日)

作・演出・出演:赤堀雅秋

出演:光石研、

麻生久美子、大森南朋、

木下あかり、田中哲司



●『原色衝動』

2016年2月26日(金)

～2月27日(土)

振付・構成・出演:

白井剛、キム・ソンヨン

映像写真:荒木経惟

『往生写真ー東ノ空 PARADISE』

■世田谷文化生活情報

センター 生活工房

[Tel. 03-5432-1543]

●「坂茂ー紙の建築と

災害支援」展

12月20日(日)まで

●「WASHINOITO

ー未来を着る、

浜井弘治の和紙の

プロダクト」展

12月26日(土)～

1月24日(日)



紙の大聖堂/  
ニュージーランド・  
クライストチャーチ2013  
©Stephen Goodenough

■世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●せたがや名曲コンサート

モーツァルト「レクイエム」

2016年1月31日(日) 14時開演

昭和女子大学人見記念講堂

出演:新通英洋(指揮)、世田谷フィルハー

モニ管弦楽団、世田谷区民合唱団 他

●第4回世田谷区

芸術アワード“飛翔”

音楽部門受賞記念公演

「末吉保雄作品個展

ー内に秘めたる声を

求めてー」

2016年3月24日(木)

19時開演

成城ホール

出演:會田瑞樹(打楽器)、

末吉保雄(作曲・ピアノ) 他

